

## 審査の結果の要旨

氏名 ロハス・ジョシュア・ロバト・ティング

本論文は、アメリカ建築家ダニエル・バーハムによって1905年立案され、その後さまざまな主体によって実行に移されたフィリピンの首都マニラ計画をバーハムの都市計画の事績と当該期の社会情勢の多角的な分析を通して明らかにし、その歴史的な位置づけを行ったものである。バーハムについては従来、一定の研究蓄積があるが、本論文ではマニラ計画で大きな比重を占めることになる都市美化計画の形成と展開がはじめて一連のものとして叙述されることになり、その結果として後述するような、マニラ計画に対する既往研究で見過ごされてきた重要な事実が明らかになった。

論文は11章からなる。1～6章が序論に相当し、研究への導入、理論的枠組み、研究対象、研究の意義、研究対象の範囲、既往研究のレビューが述べられる。続く7～10章が本論に当たる。最後の11章で全体的な結論が示されている。以下、各部分の内容と研究上の到達的・意義についてみていく。

1～6章の序論に相当する部分では、本論文が歴史学的方法を用いた分析であること、したがってさまざまな史料および歴史的事実の「hermeneutics (解釈学)」がその方法上の軸になることが強調される。具体的にはマニラ計画がどのような源泉から生まれてきたものか、そしてその実現プロセスのなかで計画段階とは異なる要素がいかなる影響を与えたかを、ダニエル・バーハムの一連の都市計画の変化のなかで読み取り、その背景を浮かびあがらせることが、本論の研究意義であることが表明される。従来の研究はバーハムの都市美計画に焦点を当てた論考や断片的な都市計画に関する紹介はあったが、マニラ計画に連なるひとつながりの計画群という認識が薄く、したがってバーハム論はもとよりマニラ計画論としても不十分であった点が指摘される。

本論7章はマニラ計画の歴史的な位置づけを行うための前提的考察にあてられる。アメリカでセンセーショナルな潮流を形成した都市美運動(7.1)、ランドスケープデザイン運動(7.2)、シヴィック・デザイン運動(7.3)はいずれも西ヨーロッパ、とりわけフランスのエコール・デ・ボ・ザールの建築教

育を大きな源泉としている。バーハムはボ・ザール留学経験をもたないが、アメリカで数多くの様式建築に腕を振るったマッキム・ミード・アンド・ホワイト事務所のマッキムはボ・ザールに学び、本格的な古典主義建築および都市景観のアメリカへの移植に大きな役割を果たした。バーハムもまたこうした動向に敏感に反応してみずからのプロジェクトを展開させていった。本章では当時のアメリカ建築界の動向を丁寧に押さえたうえで、バーハムの個人史（7. 4）および彼が手がけた数多くの都市デザイン（7. 5）の全貌に迫っている。

1893年のシカゴ博覧会、1896年の地中海旅行と同年のサウス・ショア・ドライブ計画、ワシントン D.C.のマクミラン・コミッション計画、1903年のクレーヴランド計画とウエスト・ポイント計画、1905年のサン・フランシスコ計画へのレポート、1909年シカゴ計画のそれぞれのプロジェクトについて、都市計画上の意図と計画要素について分析を試み、これらがいずれも1905年のマニラ計画に結実する手法の前提を成していることを説得的に解き明かした。バーハムの都市計画が都市美運動などの社会的背景とともに、一連のものとして分析しえたことによって、あらためて当該期のアメリカにおける都市計画のもつ別の側面が浮き彫りにされることになった。すなわち、あくまでその源泉はヨーロッパにありながら、アメリカ的都市の理想像が強く求められ、それに応えるかたちでマッキム・ミード・アンド・ホワイト事務所やバーハムは、アーバン・デザイン言語の開拓に迷うことなく向かうことができたということである。この指摘は本論の重要な成果のひとつといえる。

本論8章はマニラ計画そのものの分析であり、本論文のもっとも中核にあたる部分である。スペインの植民地時代のマニラ（8. 1）、アメリカ支配下に入ったマニラ（8. 2）がまず概観され、ついでバーハムのマニラ計画が取り上げられる（8. 4）。マニラ計画の主眼はそれまでのスペイン植民都市の小規模な都市スケールをはるかに超えた範囲を都市領域として認識し、ウォーター・フロント、公園とパークウェイ、全体の道路システム、主要建築の配置と様式、水上交通システム、保養地計画などが既存の都市の先行条件に配慮しつつ、全体として秩序と調和を示すところにあった。図8. 4bで示された著者独自の分析図がマニラ計画の総合性を雄弁に物語る。マニラ計画がこのように完成度の高いものであって、単にバーハムのアメリカ諸都市の計画の引き写しでなかったこと、バーハムはきわめて慎重に既存の都市的コンテクストを読み込んでいたこと、メガロポリス化するマニラを予見した将来計画など、従来まったく見逃されていた諸事実がここにはじめて明らかにされたのである。

9章はこうしたマニラ計画が実施に移されていく段階の問題を取り扱った部分である。1905～14年のウィリアム・パーソンズ、14～18年のラル

フ・ドーン時代を経て、1918年以降はアメリカで教育を受けたフィリピン人建築家たちがマニラ計画を引き継いでいく。ウィリアム・パーソンズはバーハムの計画意図を忠実に果たそうとしたがすべては実現せず、続くラルフ・ドーンは建築様式について大きな主張を行い、それまでのスペイン・コロニアルスタイルにかわって古典主義的な様式の普及に力を注ぐ。そしてフィリピン人建築家たちはドーンの方針を継承しつつ、ボ・ザール様式を積極的に採用し、最終的に1935年のマニラの姿が誕生する。マニラ計画のその後の展開については、ほとんど先行研究がなく、この部分の学術上の貢献は大である。総じて、マニラ計画のその後、バーハムの理想からは次第に遠ざかっていき、実現された部分は限定的という評価が一般的であるが、本論が明らかにしたように将来への展望を含む道路システムやウォーター・フロント計画などは、明らかにその後のマニラ成長を下敷きになっているのである。

10、11章が結章となり、すべてのバーハム計画がここにあらためて集められ、都市軸、シヴィック・センターと広場、公園、放射状道路、建築の調和の5つの側面について、①源泉、②採用、③適用、④創造の4段階の発展プロセスとして再定位されている。最後にバーハムの都市計画史上の再評価が叙述されて論を閉じる。

以上を要するに、本論文はダニエル・バーハムの1905年のマニラ計画について、その歴史的な位置づけをはじめ総合的に行った意欲作であるといつて間違いない。既往研究を丁寧に踏まえつつ、各章で展開される分析はきわめて論理的整合性が高く、実証レベルも高い。とりわけ、ややもすれば机上の空論的アーバン・デザインを行ったとされるバーハムがさまざまな計画案で培った都市計画手法を止揚させ、マニラ計画においてその総合性を発揮したこと、計画立案に先立って既存の都市的コンテクストが深く読み込まれていたことなどが明らかにされたことは、従来の研究史を書き換える大きな学術的貢献である。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。